

誕生日によせて

私は明治三十六年六月六日に生まれた。六月六日と六が重なっているうえに、六六三六という九九の語呂に乗る年が生まれ年となっているのは、よくよく六に縁の深いめぐりあわせと見える。こうしたわが身の冥加(?)にあやかかって、碌々または碌々齋などと雅号めいたものを用いたりしている。碌々として為すなく過ごしてきた自分にふさわしい別名を、おのずからにして得たことに、今では満足している。

戦争末期の、前々号に「大乘涙」という標題で書いたような疎開や、もめ時代に、同じ境遇の同好者を語らって、中村草田男氏の指導で月並句会をひらいたことがある。そのころはもっぱらの号を愛用していた。

六月といえは、ほぼ旧暦の五月に相当する。昔母がしてくれた思い出話によると、端午の節句の用意に粽を結っている時産気づいて、私が生まれたのだという。暦の上では同時に五月雨の季節でもある。雨に濡れた若葉と、五月晴れの空に翻る鯉幟とが、二重のイメージとなって、わが

誕生日の周辺を飾ってくれる。これは私の誕生日が近づくころきままって蘇る、おのずからな感覚である。あるいは情緒である。

このような精神風土のなから、ごく自然に思い浮かぶ古歌がある。

さつきまつ花橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

『古今和歌集』夏の部で五番目に配置された歌である。知られるように、『古今和歌集』では、四季の歌にしても恋の歌にしても、それらが、推移や進行の時間的次序に従って整然と排列されている。このことが徹底して追究されているのが、故松田武夫氏の『古今集の構造に関する研究』である。松田氏は、夏の部の巻頭から第五首までを一括して、「四月に割り当てられる歌」とし、第五首にあたる右の歌を、「四月に橋の花を詠じた一首」としている。この認定は正しいものである。試みに、第三首・第四首をあげると、次の通りである。

さ月待つ山郭公うちはぶきいまもなかなんこそぞのふるごゑ

五月こばなきもふりなん郭公まだしきほどの声をきかばや

これにつづけて、「さつきまつ花橋の……」と、素直に読めば、この歌が四月の詠であることは疑う余地がないはずである。

ところが、契沖は、『古今余材抄』で、この歌を第三首と比較して、「さきにさつきまつ山時鳥とよめるはう月にてよめり、此さ月まつは待えて花さきて後、待しほとこの事をいへり」といつている。さらにつづけて、「橘のたくひは早き年はやよひの末よりさき、遅き年もう月は過し侍らぬを、五月まつとよまれて今も仲夏の初の物とするは、昔は花の遅かりけるにや」と考証している。この考証の前半は、橘の自然の生態を忠実にとらえたものであるが、「五月まつとよまれ」云々は、「さつきまつ」の解釈で犯した誤りにもとづいた疑問であるから、論外とせねばならない。

五月をその鳴き声の最盛期とするほととぎすのやどる花橘は、やはり五月の花として、その季節に本来の美を発揚するとされていた。だからといって、同じく「さつきまつ」とうたい出されながら、契沖はどうして「山郭公」を四月に、「花橘」を五月に配さねばならなかったか納得のいかぬところである。その後今日に至るまで、諸注ごとごとくこの解を襲うてきている。「さつきまつ花橘」はやはり、「郭公」の「まだしきほどの声」を賞美すると同じく、四月のうちひそかに花ひらいて、五月の訪れをひたすら待っている「花橘」のうぶな姿を、このような言い方でとらえたものとせねばなるまい。それは、これにすぐつづく歌が、「いつのまにさ月きぬらんあしひきの山郭今ぞなくなる」と、五月を待ち得て、はじめてほらかな声をあげる、山から出たばかりのほととぎすを詠じたものであることによっても明らかである。

このような、うぶでみずみずしい花橘の放つ香に、ふと「昔の人」の袖の香をかぎとるのであ

る。それは花橘の香によって、仲絶えて久しい愛人の袖の香を連想したのではない。「五月」というかがやかしい季節の訪れを、ひたすら「待つ」姿勢にある花橘に、はからずも「昔の人」のイメージを認め、同時にその「袖の香」を、花橘の放つ香にかぎとつたのである。それは、花橘という「自然」のなかに潜在する「昔の人」がある時、ふと作者に感知されたことを意味する。その瞬間、長い時間の空白が消滅し、かつての恋人が、ふいに、まったく姿で現前する。そのおどろきが、「昔の人の袖の香ぞする」という緊縮した表現となったのであろう。

そうすると、この歌の作者は男で、「昔の人」は、その男のかつての恋人であったとせねばなるまい。『伊勢物語』の作者は、この歌をこのように読んだうえで、それをもとにして、第六十段の好短篇を構成したものと思われる。

むかし、をとこありけり。宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀いへとうし自まめに思はむといふ人につきて、人の国へいにけり。このをとこ、宇佐の使にていきけるに、ある国の祇承の官人の妻にてなむあるとききて、「女あるじにかはらけとらせよ。さらずは飲まじ」といひければ、かはらけとりて出したりけるに、着なりける橘をとりて、

五月まつ花たちばなの香をかけばむかしの人の袖の香ぞする

といひけるにぞ思ひ出でて、尼になりて、山に入りてぞありける。

公務に精励するあまり、自分に深切な愛情をそそいでくれる暇もなかったころの夫に不満を感

じ、妻は、しんじつ愛してくれろといふ他の男に従つて他国に下つていった。何年か経つて、宇佐の使として下つてきた前夫に逢い、その真意を知つた女が、昔のわが浅慮を恥じて尼になつたという話である。素材としては事新しいものではないが、それが「五月まつ花たちばなの……」の古歌を核として構成されたところに新味がある。

夫は、かつての妻が、今祇承の官人の妻となつてゐることを知り、妻に会う手段として、盃をさすよう強要した。それは、妻を見返してやろうというような俗な感情からでなく、今もかわらぬ妻への真情をなんとかして、相手に伝える機会を得ようとしたものである。たまたま酒の肴のなかにあつた橘の実から、花橘を詠んだ古歌を思い出し、それに託すという仕方だ、思いをはたしたのである。それは女への詫びの、それとない表白とも取れそうである。しかし、男は詫びの手段として古歌を口ずさんだのではなかつた。昔にかわらぬみずみずしい愛情が、この歌を口にしたことによつて男の胸を浸し、それをいちやく感知した女が、男の真意にはじめてふれることになつたのである。

男と女の本質の相違が生んだあわれな物語である。窪田空穂氏が、「男もあわれであり、女もあわれである。どちらが悪かつたからといふのでは無い。どちらもそうするよりほか仕方がないことをしたのが、あわれとなつたのである」と評していられるのもうなずける。そして、このような物語の生まれる要因が、「さつきまつ花橘の……」の歌に内在していることは、改めていまでもない。